

第29回ヨウ素学会シンポジウムと ヨウ素学会の活動

千葉大学 松本祥治／合同資源 海宝龍夫

産官学の緊密な連携の下で回を重ねてまいりました「ヨウ素学会シンポジウム」も、今年度で第29回を迎えます。ヨウ素科学を牽引する研究者や技術者が集う貴重な機会です。本稿では、シンポジウムとあわせて学会の活動についても紹介します。

会長のメッセージ



海宝龍夫会長

ヨウ素学会は、日本が世界に誇る貴重な天然資源である「ヨウ素」の有効利用を目的に、1998年に創設されました。会

報「ヨウ素」や会誌「SIS Letters」の発行ならびに毎年開催する「ヨウ素学会シンポジウム」を通じ、ヨウ素科学の発展と産官学の枠を超えた情報交流の活性化に努めています。ヨウ素科学は、物理・無機・有機化学から生命科学、さらには触媒やエネルギー・環境化学まで多岐にわたります。本学会が主催するシンポジウムは、これら異分野の専門家が集う貴重なコミュニケーションの場となっています。近年では、次世代のクリーンエネルギーとして期待される「ペロブスカイト型太陽電池」に関わるヨウ素化合物の研究が盛り上がりを見せています。

現在、ヨウ素を取り巻く環境は大きな転換期を迎えています。世界的な需要拡大の中で、資源循環型社会実現のためヨウ素の「回収・リサイクル技術」の開発が進められています。2018年には新たなヨウ素科学の創成と社会実装を加速させるため、千葉大学西千葉キャンパスに「千葉ヨウ素資源イノベーションセンター（CIRIC）」が設立されました。このような国内の取り組みに加え、当学会は

世界のヨウ素研究・産業をつなぐネットワークハブとしての役割も担っています。具体的には、「超原子価ヨウ素国際会議（ICHIC）」、「ハロゲン結合国際シンポジウム（ISXB）」、「ハロゲン化学国際会議（HALCHEM）」といったヨウ素に関連した主要な国際会議との強固な連携体制を構築しています。これにより、日本の優れたヨウ素技術を世界に発信するとともに、世界の最先端の知見を国内へと還元しています。

当学会では、こうした最先端研究や国際連携の支援のみならず、将来の科学界を担う人材育成の一環として、啓発本の出版や、「高校生理科研究発表会」の支援にも取り組んでいます。ヨウ素学会シンポジウムは本年で第29回、来年には第30回を迎えます。当学会のさらなる発展のため一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（合同資源 海宝龍夫）

第29回ヨウ素学会シンポジウム



松本祥治シンポジウム委員長

第29回ヨウ素学会シンポジウムは、9月4日（金）に千葉大学西千葉キャンパスけやき会館において開催されます。本年度は、学会賞

（技術領域）受賞講演1件、招待講演3件、一般口頭発表8件とポスター発表33件を予定しています。またポスター発表については発表前に希望者による18件のショートスピーチを予定しています。

受賞講演・招待講演・一般発表
～実用化や最新研究の紹介～

本年度のヨウ素学会賞は、積水化学工

業の別所毅隆氏、森田健晴氏、早川明伸氏の受賞が決まりました。受賞講演の演題は「実用化に向けたペロブスカイト太陽電池の開発」となります。積水化学工業では今春にフィルム型ペロブスカイト太陽電池の事業を開始されており、まさに本受賞内容が社会実装の段階にあります。

招待講演は、海外からイタリア・聖アンナ高等研究院（イタリア）のPierdomenico Perata教授ならびにチューリッヒ工科大学（スイス）のBill Morandi教授による講演、国内から北海道大学理学研究院の鈴木徳行名誉教授の講演と合わせて3件を予定しています。

Perata教授は植物生理学をご専門とされており、植物のヨウ素利用について開花促進や花序（茎）および収穫量増進、生物学的栄養強化（ヨウ素富栄養化）といった観点でのヨウ素の新たな役割についてご講演いただけるものと思います。

Morandi教授は有機合成反応をご専門とされており、種々の官能基の導入や変換反応について精力的に研究されています。本シンポジウムでは、超原子価ヨウ素を利用した窒素挿入反応についてご講演いただく予定です。複素環の骨格修飾やアルケンの酸化アミノ化開裂反応を含め、反応機構の詳細についてもご発表いただける予定です。

南関東地下に存在する上総層群帯水層にはヨウ素が濃縮して存在していることが知られていますが、なぜこれほどの膨大な量のヨウ素が同帯水層に濃縮しているかについては不明でした。鈴木名誉教授は堆積ヨウ素の物理化学的状態や挙動を推定するために、沈み込み堆積物中における水素、メタン、分子ヨウ素の生成と排出について調査されました。その結果、高圧下で起こる「フラッシュ蒸発」

によってヨウ素分子がプレートから放出されること、そして同時に生じる水素を利用した微生物メタンの生成とともに、ヨウ素の集積が起こっていることを解明されました。講演では詳細なデータとともにご紹介いただけるものと思います。

一般口頭発表は、午前に物性や機能に着目した発表4件、午後に有機・高分子に関する発表4件を予定しています。物性や機能に関する発表では、太陽電池材料や蓄電池材料といったエネルギー問題に関連する発表などが含まれています。有機・高分子に関する発表では、新規合成反応のみならず機能材料を目指した合成反応についての発表が含まれています。ポスター発表は有機合成反応などに関する発表23件、機能や物性、医薬生物に関する発表10件の合成33件の発表を予定しています。昨年のノーベル化学賞は有機金属構造体(MOF)についてでしたが、一般口頭およびポスター発表の中にはこうした構造体を利用した発表も含まれています。ノーベル化学賞の重要性を再認識するとともに、ヨウ素が様々な最先端の研究とつながり、活用されていることを実感いただけるものと思います。本年も多数の方の御参加をお待ちしております。(千葉大学 松本祥治)

国際会議への協賛と学会活動

当学会では、これまで数多くのヨウ素関連学会と強固な連携体制を築いてまいりました。本年は、5月25～28日にカナ



ダのバンフ・パークロジ・ホテルで開催された「第7回ハロゲン結合国際会議(ISXB7)」や、9月21～24日にドイツのブレーメン大学で開催される「第12回ハロゲン化学国際会議(HALCHEM XII)」に協賛しております。

また、当学会は、国際連携のみならず次世代の研究者・技術者の育成にも注力しています。毎年8月に千葉ヨウ素資源イノベーションセンター(CIRIC)と共催している小中学生対象の「夏休みサイエンスセミナー」は好評を博し、本年度5回目を迎えます。さらに、毎年9月末

第29回ヨウ素学会シンポジウム

日 時：2026年9月4日(金) 9:00～17:10

場 所：千葉大学西千葉キャンパスけやき会館

【受賞講演】

○別所毅隆・森田健晴・早川明伸(積水化学工業)「実用化に向けたペロブスカイト太陽電池の開発」

【招待講演】

1. Pierdomenico Perata (Sant'Anna School of Advanced Studies) "The Emerging Role of Iodine in the Physiology of Plants"
2. 鈴木徳行(北大理)「関東沈み込み帯での世界最大のヨウ素とメタンの濃集」
3. Bill Morandi (ETH Zürich) "Leveraging Hypervalent Iodine for Nitrogen Insertion"

【一般口頭発表】

1. ○中村優男・三木孝馬・山田朝陽・Gurvan Bosser・足立精宏・橋爪大輔・小川直毅・岡本 敏・十倉好紀・川崎雅司(北大理・理研 CEMS・理研 BZP・東大工・住友化学)「強誘電ハライドペロブスカイト薄膜における巨大シフト電流」
2. 清水剛志・平尾瑞姫・川田 愛・門脇芽衣・○谷藤尚貴(米子高専)「金属有機構造体を電極材料に用いたヨウ化物イオン電池の開発」
3. ○Beate Heissig・Maksym Skrypnik・Iryna Irodionova・Koichi Hattori (Graduate School of Medicine, Juntendo University) "Anticancer Actions of Molecular Iodine in Salivary Gland Cancer: Mechanistic Roles of ROS, p53, and PPARG"
4. ○北井秀幸・武田雄希・星子暁恵・宮崎 司(日東電工・京大)「ポリビニルアルコール中のヨウ素鎖配列と可視光吸収の量子化学検討」
5. ○筒井涼太・岡本一将・工藤宏人(関西大院理工・阪大産研)「ヨウ素原子の高い原子屈折率と分子間相互作用を活用した高屈折率・高アッペ数ポリマーの合成」
6. ○大瀬良航平・清川謙介・南方聖司(阪大院工)「超原子価ヨウ素酸化剤を活用する脂肪族アミンの触媒的分子内C(sp³)-Hアミノ化」
7. ○松岡純平・中岡玖美・佐藤春妃・井澤香林・中村 光・前川智弘(近畿大薬)「PhI(OAc)₂とSOCl₂からのジクロロヨードベンゼンの系中発生活法の開発と塩素化反応への応用」
8. ○内倉達裕・坪 楓愛・大橋夏帆・勝見桜子・塩手 風・秋山隆彦(学習院大理)「アルカリ金属ヨウ化物が促進するEDA錯体を經由した可視光駆動型炭素-フッ素および硫黄-フッ素結合の還元」

【ポスター発表】 33件(うちショートスピーチ18件)

に千葉大学で開催される「高校生理科学研究発表会」にも協賛しており、ヨウ素関連の優れた研究テーマに対して「ヨウ素学会奨励賞」を授与しています。今後ともこうした活動を通じて未来の科学界を担う人材の育成に貢献してまいります。

© 2026 The Chemical Society of Japan

まつもと・しょうじ 千葉大学大学院工学研究院(共生応用化学コース) 教授。博士(工学)。ヨウ素学会副会長、シンポジウム委員会委員長。

かいほう・たつお 株式会社合同資源 上席アドバイザー。理学博士。技術士(化学部門)。ヨウ素学会会長、事業委員会委員長。